

儒教の中興の祖に、南宋の儒学者、朱熹（1130年～1200年）がいます。

朱熹は「論語」「孟子」「大学」「中庸」のいわゆる「四書」に注釈を施しました。

それが、その後権威あるものとされ、科挙などで重視されるようになりました。

朱熹は、それまでばらばらに学説や書物が出され、矛盾を含んでいた儒教を、初めて体系化した、と言えます。

また、仏教思想の論理体系性、道教の無極及び禅宗の座禅を批判し、それと異なる静座という行法を持ち込み、儒教を、道徳を含んだ壮大な思想にまとめました。

朱子学は身分制度の尊重、君主権の重要性を説いており、明により、その理論の部分が国教と定められました。

13世紀には朱子学は朝鮮に伝わり、従来の国教である仏教に代わり、唯一の学問（官学）とされ、朝鮮王朝の国家の統治理念として用いられることとなりました。

日本においても、中近世ことに江戸期に、その社会の支配における「道徳」の規範として朱子学に重きがおかれたため、後世にも影響を残しています。

朱熹は、その著作「小学」の中で、老荘思想を批判しています。

『 小学題辞 』

世遠人亡、經殘教弛、蒙養弗端、長益浮靡、郷無善俗、世乏良材、
利欲紛拏、異言喧逐。

世遠く人亡（う）せ、
經殘（そこな）われ教え弛み、
蒙養端（ただ）しからず、
長じて益々浮靡、
郷に善俗無く、
世に良材乏しく、
利欲紛拏し、
異言喧逐（けんかい）す。

さて、利欲の掴み合いをするかと思えば理屈らしいことを言う。
これが「異言喧逐」である。

「異」は異端の異の字で、本当の道理を主にせず、好き次第を言うこと。

少しずつ理屈を持って来て、取っ付け引っ付け、色々と騒ぐ。

仏や老荘がこれ。

聖人の道の振りの変わったこと。

「喧慝」。喧しく打つと読み、これを「利欲紛拏」と並べて見るのである。

学問をせず、君子になる心がないから利欲紛拏。

本当のことを知らず、世を欺き、聖賢を推す心からして異言喧慝。

これが人の気々を動かし、様々な手短なことを言って人を教える。

これが一番嫌なことで、聖学に似たことを言って聖学の書に弓を

引く。

近頃流行っているものに、本心会得するということがあるそうだ。

これらがよい様な浅はか言って、人の気々を動かす。嫌なこと

の一番である。

訳＝稲葉黙齋（1732年～1799年：江戸時代の朱子学者）

黙齋は続けて『小学』の書を評し、

「人間の一生、この書に備われり。この一書を熟復すべし。

謂う所の親・義・別・序・信を吾が身に得ること、

この一書に全備す。」

と言います。五倫を明らかにするのが『小学』の主題となるので

あります。

教えが大事だとする立場、人は教えがなければならぬとする立

場が、無為自然を尊び人為を否定する老荘への批判へと繋がり、

五倫が備わっているとする立場が、虚無寂滅を唱え、五倫をない

ものとする仏への批判へと繋がります。